中世後期真名軍記の背後

橋村勝明

一、はじめに

稿者はこれまで、真名本に関わる言語事象について検討を重ねてきた。その検討を通して、真名本の背後にある学問や成立に関わる諸課題の解決の糸口を見つけようとしてきたのである。そしてその成立については、従来様々な見方が提示されてきた。例えば、高松政雄氏は、真名本『伊勢物語』について、「終始、学者的態度でもって物されたものとは云い難く、多分に衒気が目立つものである[1]。」としている。また、足立雅代氏は、『真字寂漠草』『真字百人一首』の序文から、「当時、文章解釈のために漢字を用いるというのは、真名本に限られたことではない[2]。」としながらも、真名化の目的であると捉えている。もちろん、成立の目的や事情は数ある真名本を一括りにすることはできず、それぞれの事情に基づくさまざまな背後が想定される。

真名本に関わる言語事象の背後には、当時を生きる人々の生活や文化がある。言語事象から生活や文化を描き出そうとする、これまでの稿者の方法は日本語学としては妥当な方法ではないかと考えるが、一方で言語事象の解釈のための生活や文化に対する理解も必要であろう。そのような考えのもと、中世後期真名軍記の成立の背後にある学問的基盤とは何か、種々の資料に基づき検討したい。

なお、本稿では主として真名軍記の成立について検討をしたいが、まずは表記により軍記を区別し、別に検討するのではなく、軍記そのものの中に真名軍記が位置付く以上は、仮名交じり表記の軍記についても視野に入れつつ検討をすすめたい。

二、軍記と連歌

軍記には内容的に、或は成立する際に連歌との関係性を指摘できるものがある。このことは、歴史学的な視点からも武士と連歌との関連が指摘されている[3]。

内容的な関係性については、『大塔物語[4]』に以下の記述がある。

前打者頓阿云二力阿弥一遁世者此頓阿弥者面貌而其躰
太賤雖レ然於二洛中一者名仁也連歌者学二侍従周阿弥
之古様一早歌者伺二阪波顯阿會田彈正之両流一物語者古
山之珠阿弥之弟子弁舌宏才者讀二師匠一程之上手也

（三ウ７）

京都から信濃の守護として信州に向かう小笠原長秀に随行する人物として、頓阿（頓阿弥）がおり、連歌の教養がある人物として紹介されている。

また真名本ではないが、毛利元就と陶隆房との戦いを描いた『厳島合戦記[5]』には、以下の用例から大内義隆が歌を好んでいた様子がうかがえる。

義隆詩歌乱舞にのみふけり諸士を不懐杉伯耆守相良遠江守と云両出頭人に仕置を任せ自分には乱舞歌道鷹野はかりにて

（二ウ２）

義隆の前江出る輩は歌を読候者乱舞酒宴の相手扨は右之公家衆斗にて

（五オ３）

義隆天性やはらかなる人にて是を大事と思ひたまふ心もなく歌道酒宴鷹野はかりにて

（六オ４）

『厳島合戦記』によると、「軍法の心懸も弓馬の沙汰もなく」「歌道」に耽ったために、陶隆房による下克上により討ち取られるのである。これらの用例に見える「歌道」「歌」であるが、武士の教養としての和歌全般として捉えるのではなく、連歌の催しではないかと考える。そのように考える理由は、大内義隆の辞世にある。

討人も討たるゝ人も諸共に如露亦如電応作如是観

（一〇オ２）

傍線部で示したように、辞世の下句が「亦」を除いて全て漢語である。伝統的な和歌では漢語を避け、和語を用いるにも関わらずである。このことについて佐竹昭広氏は次のように述べる[6]。

和歌ではとくに漢語が忌避され、確立した連歌もやまとことばで詠むという伝統を受けついでいるものですから、そこで漢語を使うというようなことは、まさに外道の沙汰ですけれども、その外道の沙汰をあえてやってみるというところに、遊びとしての連歌、俳諧としての連歌がある。

和歌に漢語を持ち込むことは、連歌・俳諧ではあり得る。大

内義隆の辞世は、連歌・俳諧に親しんでいたために詠むことができたものであろう。

『厳島合戦記』と同じく仮名交じり表記ではあるが、『島原軍記[7]』に連歌の場面が登場する。『島原軍記』は、龍造寺と有馬・島津連合軍とで繰り広げられた沖田畷の戦いを描く軍記である。その前哨戦である深江城攻めの場面で、島津の武将である新納忠堯と簑田平馬助との間でなされた短連歌がある。

或ル夜ノ参會ニ忠堯
　コノ世ニテ契リシコトモ夢ナレヤ
平馬即チ
　後ノ世マテモヒトツウテナニ　（二オ４）

このち、新納忠堯と簑田平馬助は戦死する。新納忠堯（刑部太輔）は次の場面にも見られる通り、連歌に通じた人物とされている。

刑部太輔磯涯ニテ若キ衆ト寄合盃ヲメクラシ遊山ノ當座ニ
　海アヲシ底ヤ　夏山夕涼ミ
ト刑部太輔發句ヲ口號候此脇ヲ深水宗方
　ウラノ見ル目モ風カホルコロ
ト被続候テ百韻獨吟候右発句ヲ案シ盃ヲ取リハヤシ候時ハ何ノ思モアルマシク候　（二ウ６）

これらの他、詳細に多くの軍記を検証したわけではないが、右に見られるように軍記の内容と連歌とは関わりが認められるのである。そして、それは武士の教養としての連歌が根付いていたためであろう。

さて、真名軍記の成立と連歌との関係性については、『播州征伐事』『惟任退治記』『柴田退治記』の作者であり豊臣秀吉の御伽衆である大村由己が、連歌師であることで知られている。その大村由己について、桑田忠親氏は以下のように説明している[8]。

播磨の人、梅庵と號し、右筆として秀吉に仕えた。外典において當代第一の學僧と呼ばれ、また歌道に通達し、天正記の著者として名高い。

また、『惟任退治記』を仮名本に改めた『総見院殿追善記』の作者である松永永種は、秀吉の御伽衆である大村由己と親交があった[9]。『総見院殿追善記』の奥書には次のようにある[10]。

今本意を達し此の孝養を行事秀吉一世冥加末代の亀鑑也仍藻虫齋由巳記置所也萬歳珍重云々
　于時天正十稔十月廿五日　謹誌之
右一巻者杉原七郎左衛門尉家次篇秀吉御名代京都執権之聞此抄物常時之御名誉後代迄可相貽一冊也故研硯氷染禿筆為諸人一覧態交仮字書之者也
　徳庵叟永種筆

（四三五上７）

『総見院殿追善記』と同系統の本文を持つ、『豊臣公報君讎記[11]』の末尾にも同様に大村由己の名が見える。

親本意を達し此孝養を行給ふ事秀吉一世の冥慮末代の
龜鑑也仍記之
萬歳々々珍重至祝而己
天正十一年猛冬日　永種
右一巻者播州之住藻虫斉由己蒙秀吉之仰作記之云々
今天下之司賦玄以尊老巖命難翁之間召憚遍研蓋展白楮
陰民雅者也爲恐之

（二九オ４）

この松永永種については、大村由己との関わりだけではなく、子が松永貞徳であることからも、おそらくは連歌を通じた学問的基盤を共有していたものと考える。

『文正記』の書写者である福住道祐[12]については、『種玉庵宗祇伝』『宗長居士伝』という二人の連歌師の伝記の作者であることから、連歌との関係が認められるのである。また、当時「文字知り」として評価され、そのような学問的背から『文正記』中に古文が使用されているのではないかと指摘した[13]。福住道祐が書写した他の資料として、『花月対座論[14]』がある。これも漢字表記の軍記であるが、その内容は花と月とが合戦をするというものである。室町物語の一つに『花鳥風月の物語[15]』があり、それを下敷きにしているものではないかと考えられる。『花月対座論』には花や月の異名が数多く登場しており、恐らこれらの異名は連歌の素養が求められる内容であろう。このようなことから、間接的ではあるが『文正記』の書写者である福住道祐についても連歌との関連が想定されるのである。

三、軍記と時衆

次に、軍記と時衆との関係について資料に基づき検討してゆく。『大塔物語』の物語終盤には、次に掲げるように時衆が登場し、戦後の凄惨な状況を目の当たりにする。

去間善光寺妻戸時衆同十念寺之聖大塔人々既自害聞召
急至于彼合戰庭之爲躰見廻給不レ被レ當レ目作法也

（三三ウ６）

そして、戦後処理に関わるのである。遺骸を弔い、遺品を妻子のもとに届けるために戦地に集めるのである。

彼時衆達此彼落散屍共一々取納或成梅檀煙或築レ

塚立ニ率都婆一各与ニ十念一遍励弥陀引接之願望一利ニ益之一至ニ于無レ墓形見筆梍一取集被レ送ニ妻子方一

（三四オ７）

このように、『大塔物語』では物語の終盤において時衆が度々登場する。前項で掲げた『大塔物語』の用例では頓阿弥、力阿弥、周阿弥、珠阿弥と阿弥号をもつ人物が登場する。このうちの、連歌について「周阿弥之古様」学んだとする周阿弥とは、二条良基、救済とともに並び称される周阿であろう。阿弥号を持つということで必ずしも時衆僧であるとは限らないが[16]、時衆との何らかの関わりを持って称していたものと考える。

軍記と時衆との関係については、『大塔物語』ばかりではなく、従来『太平記』や『明徳記』については指摘があった。特に『明徳記』の作者については、和田英道氏は時衆に帰依するもので、温井入道楽阿か或いは楽阿のような被官の武士であると想定されている[17]。

これらの他、『島原軍記』についても時衆僧であるとみられる人物が登場する。

大友義統使僧ヲ以テ勝利ヲ賀ス其書ニ曰ク於今度高木嶋原表被得勝利候尤珎重候此等ノ儀為可申達染筆候仍新勅撰一冊定家卿真筆進之候於御自愛者可為本望候猶稱名寺其阿可有演説候恐々謹言

謹上　　左衛門督義統判

島津修理太夫殿

（一〇ウ９）

「其阿」は、時衆においては複数の上人が名乗っている。沖田畷の戦いが一五八四年であるので、この頃「其阿」と称したのは遊行三十一代の同念（一五一八・一五八七）と、遊行三十三代の満悟（一五四三・一六一二）であろう。この二人のうち、同念は日向都於郡で入寂しているので、右の書状にみえる「称名寺其阿」とは同念ではないかと考える。[18]

沖田畷にて龍造寺に大勝した島津修理大夫義久に、大友義統から書状が送られる際に、時衆僧を使者として遣わしている。もちろん、時衆に限らず戦国期にあっては僧侶は比較的各地を自由に行き来している。ただし、単に往来をするだけではなく武士に帯同し戦場に赴く僧、つまり陣僧としては時衆が多かったとされている[19]。

そして、高野修氏はこのような背景から、武士と時衆との関係について、以下のように指摘している[20]。

一遍のころから武士の信者は多かったが、このように戦場における陣僧という役割を演じ、時衆は武士の生活にいっそう深く入り込んでいった。それは逆に平時にも持ち込まれ、宗教を一応離れた精神生活や、娯楽・芸術にまで時衆が活躍するようになるのである

その、娯楽・芸術には連歌も含まれると考える。時衆と連歌との関係については、先の『大塔物語』に見られる阿弥号をもつ者達のほか、鎌倉時代後期に活躍した善阿[21]や『井蛙抄』『愚問賢注』の著者である頓阿（俗名二階堂貞宗）などが知られている。また、今川了俊の『落書露顕』には時衆と連歌との関係が伺える記述が見られる[22]。

つくしに侍りしころ、人の京連歌とてかたりし句に
　渡し守船つなくまてくれはてゝ
といふ句を□て侍りし。おもしろくきゝて侍りしを、後に聞侍れば、四条時衆、あみだ佛句にて侍りける。
（巻第二百九十六、四百四十七）

「四条時衆」とは、時衆十二派のひとつで金蓮寺を本山とした四条派であろう。

ここまで述べてきたように、軍記と連歌、軍記と時衆との関係が伺え、さらに連歌と時衆との繋がりについても指摘できるのである。ただ、それぞれの関係を繋ぐものは軍記の記述内容や、文化史・宗教史的な事象であり、日本語学上のそれではない。そこで、軍記と連歌、時衆とを繋ぐ日本語学上の事象について、次に述べたい。

四、軍記とその用字

池上禎造氏は、真名本を分類するに際し、『万葉集』の用字から四要素を想定し、「表意文字的に」「訓で読む」（甲）ものと、甲を中心に「音を借る」「訓を借る」を混ずる（乙）ものとに大別した。真名本の『曽我物語』や『平家物語』のほか、多くの真名軍記が甲に分類され、乙には真名本『伊勢物語』などが分類される[23]。

甲の主な特徴として従来指摘されてきたことは、その特異な国字や宛字にあった。そのような国字について、山崎美成の『文教温故』（一八二八刊）には、国字を「新在家文字」として掲載し、その目的を連歌に用いるためとしている[24]。

衞（ちどり）　雫（しづく）　凩（こがらし）　椦（もみぢ）　杜（もり）　俤（おもかげ）　この類は連歌の懐紙の為メに造れる文字なるよしこれを新在家文字というとかや
（巻下三オ５）

今野真二氏は、これらの文字が『大山祇神社連歌』において実際に使用されていることを指摘している[25]。ただ、問題としては、連歌の文字とされる「新在家文字」と軍記に用いられる国字とがどの程度重なっているのかである。このことを検証するためには、右の資料のみならず、より広く連歌における国字の層と、真名本における国字の層とがどのような重なりを見せるのかという検証が必要である。今後の課題としたい。

次に、真名本『伊勢物語』などの真仮名による本文の成立に

ついてであるが、これらの用字については『万葉集』との関係が指摘されているところである[26]。では、『万葉集』の用字がいかにして真名本成立に関わっているのか、ということの歴史的背景については、今川了俊の『落書露顕』に重要な記載がある。

又万葉集の秘事、口伝の事也。昔の仙覚律師の説とて、由阿法師といひし者、あまたの人々に教しより、此秘説も今は昔に下たる上は、我等ばかり非レ可レ秘なり。

（巻第二百九十六、四百六十一下7）

由阿は、藤沢遊行寺の時衆僧で万葉の学を仙覚に学んでいる。右の記載によれば、万葉の学は由阿によって巷説に流布することになるのである。小川剛生氏は、由阿と二条良基との交流から由阿の古典研究が連歌の創作に一定の影響を与えていることを指摘している[27]。

真名本との直接的な関係は指摘し得ないが、万葉の学が時衆僧によって広く知られることとなったということは重要であろう。もちろん、万葉の学といっても何が伝えられたのか、どのように広く知られることとなったのかということについては、慎重にならなければならない。

真仮名については、真名本『伊勢物語』だけではなく、例えば池上氏の分類でいう所の甲類にあたる真名軍記については助詞助動詞の類に使用されているし、また真名本の『平家物語』についても一部に真仮名が使用されている。『平家物語』で使用される真仮名の主な用法は、助詞助動詞以外に和歌の部分に見いだすことができる。そこで、真名軍記のいくつかにおいて和歌がどのように表記されているのかを纏めたものが左である。◎を付したものが和歌部分に真仮名を使用する。

【真名本平家物語に於ける和歌の表記】

平松家本	漢字
◎熱田本	漢字真仮名交じり、漢字平仮名交じり
◎源平闘諍録	漢字真仮名交じり
四部合戦状本	漢字片仮名交じり

【右以外の真名本に於ける和歌の表記】

神道集	漢字片仮名交じり
曽我物語	漢字片仮名交じり
大塔物語	漢字平仮名交じり
豆相記	漢字片仮名交じり

右から伺えるように、真名本であるからという理由で、真名軍記において和歌を真仮名で記すことは無いのである。むしろ漢字仮名交じりとしている様子が伺える。右のうち『源平闘諍録』に収載されている四六首の和歌について、真仮名の用法を分類すると以下のようになる。まず、『源平闘諍録』の和歌を記し、平仮名で読みを記した[28]。

①一字一音節仮名

有明月明石浦風波計古曽夜見志賀　（一之上８ウ⑨）
ありあけのつきもあかしのうらかぜはなみばかりこそよるとよみしか　（上五九）

②一字二音節仮名

平屋那留宗盛何左和具覧柱登憑武亮歟於士志天
（五19オ⑦）
ひらやなるもねもりいかにさはぐらんはしらとたのむすけかおとして　（下一三二）

③訓仮名

生取土覧多免土思江波　（八之下13ウ⑨）
いけとりとらんためとおもへば　（下四二六）

①から③に見るように、一見一字一音などのように『万葉集』の用字法との重なりが見られるようであるが、例えば具体例として「古曽」の「古」は甲類音で、「曽」は乙類音であるので、文字列としては『万葉集』に確認できない。また、③の「江」についても音韻変化後の用字であるので、『万葉集』の「おもへ」の「へ」に「江」が宛てられることはない。『源平闘諍録』成立段階において、上代特殊仮名遣いやハ行転呼に対して注意が払われていないことは当然であるので、このような違いは想定しておかなければならないが、『万葉集』において「古」「曽」「江」が仮名文字として使用されているという事実には配慮が必要である。

従って、このような視点に基づいて『源平闘諍録』に収載されている四六首すべての真仮名について検証を行わなければならない。これについては、別稿を用意したいと考えている。

ここまで、国字と真仮名が連歌および時衆と如何に関わっているのかについて述べてきたが、最後に『和歌集身躰抄抽肝要』について触れておきたい。この資料は、国字並びに音仮名が用いられているという点で重要であり、山内洋一郎氏に詳細な報告がある[29]。この著者である成阿は、連歌師救済の門人で二条良基とも交流のあった人物である。この『和歌集身躰抄抽肝要』は夙に「辻（ヲシタツ）」「辻（ヲシマロハス）」（二八二8）や「題（カエリミル）」（二九二6）のような国字が掲載されていることが指摘されている[30]。このうち、「辻」については『太平記』や『応仁記』に見られることが指摘されているが[31]、その他次に掲げるように『大塔物語』にも見え、国字を介した連歌書と軍記との関係が指摘できるのである。

潜（クヾル）一堀水（ノヲ）二者 拝切（ハザンブト）漬（ツケドンブトツキ）拝 突入（コヂテハ） 剥（タフシツイテ） 々辻 突（コロボシ） 々 皷（ハレ） 或被
剣（ハギ）二取着物（キモノヲ）一　（二九ウ1）

右の用例については、佐倉由泰氏が詳細に検討され、「辻」の他『大塔物語』に見える用字と、往来物である『瑣玉集』との共通点を指摘した上で、次にように述べている[32]。

『大塔物語』の記述に真名表記ならではの見て味わえる

仕組みと工夫が凝らされているのも、『瑣玉集』と共通の文化基盤、学問基盤に立つためであると考えられる。

用字の背後にある学問的基盤が様々に重なり合って形成されているものであることが伺える。右に掲げた様々な資料に見える国字や真仮名について、真名本における用字と比較し、その重なりについて慎重に検証しなければならない。今後の課題としたい。

五、まとめ

本稿は、真名軍記の背後を大枠において考えるところを記したのみで、なんらの日本語学的検証を経たものではない。まずは見通しを示し、今後の検証の在り方を提示したにすぎない。しかし、日本語学的な事象が歴史文化の発露であるとすると、それに対する視線も必要であろうと考える。

池上禎造氏は、真名本の成立について次のように指摘している[33]。

筆作者のわからない場合が多いが、ある地方ある特定の社会の人に限られていないことの見当はつく。（中略）本稿では触れられなかったが、作文諷誦文の系統と日記記録往来物と今昔物語風のものとを或は横に考え、他の一側に運歩・節用の類を置くことによって、徒らに荒唐なる無学なる特殊なる存在とは思えないのである。

真名本には当然のことながら何らかの学問的背景があり、しかもそれは一般性、社会性がある。そのような学問的背景を何に求めるべきであるか、ということについてはここまで時衆を主体とした連歌的教養の可能性について述べてきたのである。

軍記の目的については、笹川祥生が記録すること、またそれによって名を残すということにあると指摘されている[34]。

敗者には敗者なりの自負があり、敗者であるが故に、自分たちが生死を賭けて果した役割の重さを、記録することによって確認したいという願望は、より強かったのではなかろうか。

また、梶原正昭氏は戦国軍記についてその成立の背景を詳しく分類している[35]。それぞれの軍記はそれぞれの背景を持っているものと考える。例えば、『曽我物語』は奥書に見える「日助」「日我」の名や、妙本寺蔵『いろは字』との関連から日蓮宗との関わりが認められる[36]。従って、本稿の意図するところは、軍記と時衆による連歌的教養とを単純に結びつけようとするようなものではない。

ただ、ある種の軍記においては陣僧としての時衆関係者が、連歌的教養を背景として鎮魂を目的とした真名軍記成立に関わった。そしてその後、そのような学問的背景が真名軍記という形式を支え、さらにはその目的を変えて事績を喧伝するため

に、大村由己のような連歌的教養を持つ人物が真名軍記成立の担い手に変わっていったのではないか。聖なる世界と俗なる世界とを行き来する遁世者、桑門であるからこそ和と漢とを行き来し得たのであろう。そしてその結果、漢字仮名交じりや真名本という多様な表記体を持つ軍記が成立することとなった。真名軍記は、日本語学の視点からはその特異な表記が注目を集めてきたが、その成立の背景というのは決して特異なものではなく、他の軍記とともに関係性を持ちながら成立したものと考える。

一方で、連歌、時衆を介した俗なる学問基盤があるとすると、その全体像の解明は困難を極めることとなる。というのは、俗なればこそ伝統的な旧仏教や公家の学問には縁遠く、漢字や真仮名に対する新たな解釈が加わる余地が見いだせるからである。このことは同時に、新たな解釈が加わるという部分に伝統的な漢字の用法からの脱却が認められるとするならば、中世における新たな学問の基底として良いともいえるだろう。その実態解明は今後の課題としたい。

---

1 高松政雄「真名本伊勢物語考-主にその表記法の特徴について」（『国語国文』第三五巻第八号）
2 足立雅代「真名本と和漢聯句-『真字寂漠草』の場合-」（『国語国文』第五八巻第四号）
3 綿貫豊昭『戦国武将と連歌師』（平凡社、二〇一四年一一月）
4 本文は、嘉永四年版本の紙焼き写真による。
5 本文は、山口県文書館所蔵本の紙焼き写真による。
6 尾崎雄二郎・島津忠夫・佐竹昭広『和語と漢語のあいだ』（筑摩書房、一九八五年六月、八頁）
7 本文は鹿児島大学所蔵本の紙焼き写真による。
8 桑田忠親『大名と御伽衆』（青磁社、一九四二年四月、二五頁）
9 『日本古典文学大事典』（明治書院、一九九八年六月、「大村由己」の項）には、「秀吉サロンの一員として山科言継・里村紹巴・松永永種等と親しく、藤原惺窩とは儒学上の交流があった。」とある。
10 本文は、続群書類従完成会『群書類従』第二九輯による。
11 本文は、国会図書館所蔵本の紙焼き写真による。また、拙稿「国立国会図書館蔵『豊臣公報君讎記』解説并に翻刻本文」（『広島文教女子大学研究紀要』第三七号二〇〇二年一二月）を参照した。
12 福住道祐については、市古夏生『近世初期文学と出版文化』（若草書房、一九九八年六月）に詳しい。
13 拙稿「松平本『文正記』に於ける古文の使用について」（『文教国文学』第五〇号、二〇〇六年二月）
14 香川県歴史博物館に寄託保管されている。本文は、漢字表記文である。
15 横山重・松本隆信『室町物語大成』第三（角川書店、一九七五年一月）に収載されている。
16 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達『岩波仏教辞典』（岩波書店、一九八九年、「阿弥衆」の項）に、「茶の能阿弥、花道の台阿弥、作庭の善阿弥・相阿弥、能の観阿弥など、いわゆる阿弥号を称する人々は、時宗の僧と考えられているが、実は客寮衆もしくはその子や子孫とみるべきであろう。」とある。
17 和田英道『明徳記　校本と基礎的研究』（笠間書院、一九九九年三月）
18 高野修『時宗教団史』（岩田書店、二〇〇三年三月、一三六頁）
19 高野修『時宗教団史』（岩田書店、二〇〇三年三月、九二頁）に、「鎌倉時代末期から南北朝・室町・戦国時代にかけて、出陣する武士に従い、戦場を供にした僧侶には、時衆が多かった。」とある。
20 高野修『時宗教団史』（岩田書店、二〇〇三年三月、九四頁）
21 『日本古典文学大事典』（明治書院、一九九八年六月、「善阿」の

項）には、「七条道場金光寺（時宗）の僧か。」とある。

22 本文は、続群書類従完成会『群書類従』第一六輯による。一四二二あるいは一四二三年成立。

23 池上禎造「真名本の背後」（『国語国文』第一七巻四号）

24 本文は、早稲田大学の「古典籍総合データベース」に掲載されている画像データによる。

25 今野真二『大山祇神社連歌の国語学的研究』（精文堂、二〇〇九年八月、五〇六頁）

26 真名本『伊勢物語』と『万葉集』との関係については、高橋忠彦・高橋久子『真名本伊勢物語　本文と索引』（新典社、二〇〇〇年三月）、木村晟・瀬尾邦雄・柳田忠則『真名本伊勢物語』（翰林書房、一九九五月一〇月）などの研究編に詳しい。

27 小川剛生『二条良基研究』（笠間書院、二〇〇五年一一月、三九一頁「由阿の万葉学の成果」）

28 和歌の読み方（真仮名の読み方）については、福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録全注釈　上下』（講談社学術文庫、一九九九・二〇〇〇年）によった。あわせて、用例にはその所在を記している。

29 山内洋一郎「『心躰抄』に見る漢字表記の特性-室町時代初期の特異な漢字資料」（『国語文字史の研究　十』和泉書院、二〇〇七年一二月）

30 堀部正二『和歌集身躰抄抽肝要』（大学堂書店、一九六九年六月）の阪倉篤義氏序文に指摘されている。

31 蜂谷清人「国字「辷」の成立と訓の変遷-「まろぶ」「ころぶ」そして「すべる」へ-」（『国語文字史の研究　六』和泉書院、二〇〇一年一一月）

32 32 佐倉由泰『軍記物語の機構』（汲古書院、二〇一一年二月、四五六頁）

33 池上禎造「真名本の背後」（『国語国文』第一七巻四号）

34 笹川祥生『戦国軍記の研究』（和泉書院、一九九九年一一月、一八頁）

35 梶原正昭『室町・戦国軍記の展望』（和泉書院、一九九九年一二月、「付論　戦国軍記の展望」）

36 『曽我物語』と『いろは字』との関係については、拙稿「妙本寺本曽我物語における「則」字訓について」（『国文学攷』一五七号、一九九八年三月）において指摘した。